

防災情報チラシの配布を

しています

近年、毎年のように暴風雨、地震等の災害が日本全国を襲っています。自然災害の発生は止めようがないと思います。従って、私たちは自分自身の身を守ることを考えておかなければなりません。そのためには、適確な災害情報を受け付ける必要があります。そういう時、気象庁が専門的な立場からテレビ等マスコミを通して情報を流してくれます。地震・津波だけではない、台風情報、竜巻や雷の話、気温予報や天候情報もあります。「和歌山県の気候変動」には、和歌山県の年平均気温の将来予測も詳しく書かれています。「2週間気温予報と早期天候情報」には、2週間の気温予報の仕方、早期天候情報では、著しい高温や低温、降雪量が予想される場合に注意を呼びかけるために発出しているのですね。

今、稲むらの火の館には、このような気象庁が発行した各種の災害の説明や防災情報のチラシを置いてくれています。3階に、「和歌山地方気象台コーナー」という書架を置いて、いろいろの気象に関する情報が提供されています。



「気象庁のしごと」のパンフレットには、気象庁の仕事の内容を分かりやすく書かれています。自然災害の危険から命を守るための情報です。子ども達の学習にも役に立つ情報だと思います。友達や家族と気象や災害を考える参考になると思いますので、取りにお越しください。

伊藤和明先生講演会のご案内

この度、NPO法人防災情報機構会長をされています伊藤和明先生からお申し出をいただき、講演会を開催していただくことになりました。

伊藤先生は元NHKの解説委員として地震や津波のあった時に、解説をされていました。

1953年東京大学理学部地学科を卒業後、同大学教養学部助手を経て、NHKに入局、科学番組ディレクターをされていました。大きな地震があった時には、その解説をされていたのが印象に残っています。



昭和58年に起こった日本海中部地震による津波で、10数名の小学生が犠牲にな

って以後、「稲むらの火」を教科書へ載せての防災教育の必要性を訴えられていました。政府の、地震調査研究推進本部政策委員会委員や中央防災会議専門委員等、数々の役職も歴任されました。地震・津波の書籍も多数出版されています。

この度の講演会は下記のとおりです。

日時 令和4年7月2日(土)
午後1時30分～3時00分
場所 稲むらの火の館3階
演題 『歴史に学ぶ津波災害』

講演会の定員は60名です。申込順とします。開催についての連絡をしなければならない可能性もありますので、参加の申し込みは必ずお願いします。TEL 0737-64-1760

いつもの講演会と同じですが、講演を聞いていただくだけは無料ですが、その前後館内を見学される場合は有料になりますので、申し添えます。

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第15回 だれのための災害情報なのか

災害情報のありかたを考えると、それがだれに向けての情報なのか (to whom) を抽象的に考える機会が多いのだが、だれのための情報なのか (for whom) を具体的に突き詰めて考えることは残念ながら少ないように感じられる。

たとえば、豪雨・洪水、土砂災害などのリスクの高まりを伝達する気象関係の情報に言え、年々、高精細になってきているが、難解なデジタル情報が何種類も作出されて、かえって困惑しているという住民の声も聞かれる。

本来であれば要配慮者にこそ届けたい重要なメッセージが含まれているのに、情報の難易度が当の要配慮者からすれば高過ぎるのだ。このような mismatch を解消していかなければならない。

江戸時代、安政の南海地震の際、濱口梧陵（以下、梧陵さん）は、稲むらに火をつけて住民の津波避難に資する視覚的な情報を与えた。それはもちろん窮余の策であったのだが、梧陵さんの「こうすればきっとみんなはわかってくれる」という広村の住民に対する篤い信頼と、一人ひとりの顔が浮かぶほどの“広村の住民のために” (for whom) という強い思いがこもっていた点が死活的に重要である。

現代に話を戻すと、東日本大震災の際には、防災無線で避難の呼びかけを強い命令口調でおこなったことが奏功した茨城県大洗町の事例が報告されている。筆者が現地で調査したかぎりでは、このときも、町(長)に対する町民からの信頼と、消防司令達からの町民に対する信頼という「相互信頼」関係があったことが基盤となっており、そしてやはり、高齢化が進む“大洗町の町民のために (for whom)” という強い思いが、敢えて“直球で”情報を伝える英断を後押ししていた。このように、for whom の観点から、災害情報のありかたを虚心坦懐に見直すことも必要である。

【手紙から】

先日、曾我様という方から電話をいただきました。用件は、「安政津波の際に、梧陵さんが村人に避難を呼びかけたのは、「広村稽古場」の学生と走り回ったのですね。」ということでした。私は、でもそういうことが載った資料はありません。とお答えしたのですが、その後、手紙等をいただきました。ご自分が書かれた「東日本復興計画私案—広村堤防に学ぶ—」や「子ども文化と教育研究」誌に掲載された『実践研究 魅力的な授業 広村堤防に夢を託して—伝記文「先人のおくりもの」から学ぶ—』等の冊子等をお送りいただきました。また、この方はある教科書会社から依頼を受けて「先人からのおくりもの—広村堤防—」という寄稿もされたそうです。結果的に、教科書へは掲載されなかったそうですが、『「濱口梧陵」「稲むらの火」「広村堤防」』を題材として寄稿されているようです。普段、私たちの知らないところでもこのように取り上げてくれているということが分って、たいへんうれしく思いました。

現在のコロナ禍の時代にあって、多くの皆さまが集まったの会合はほとんどなくなりましたが、いろいろの雑誌等出版物へ取り上げていただきました。取材を受けて載せていただいたのもありますし、原稿を依頼されて提供させていただいたのも、いくつかありました。『「濱口梧陵」と「稲むらの火」』を取り上げていただくのは、津波防災の啓発に役立つと思います。ともかく、当館は見学に来ていただいて、“いざっ”という時に躊躇なく避難するという心を留めていただければ、被災者が犠牲者が減るのですから。

<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター

〒643-0071 住所 和歌山県有田郡広川町広 671

<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>

*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)

*休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)

(世界津波の日の11月5日は開館)

年末年始(12/29～1/4)

*記念館だけの入場は無料です

*また、6月15日と11月5日は無料です